国宝 源氏物語絵巻の世界へ
ようこそ

徳川美術館蔵 国宝「源氏物語絵巻」全巻を日本語と英語でご紹介します。

Welcome to the world of National Treasure *Genji Monogatari Emaki*

Introducing the whole story of the National Treasure
"The Tale of Genji Illustrated Scrolls" (in the collection of the Tokugawa Art Museum)

国宝 源氏物語絵巻

徳川美術館蔵

国宝「源氏物語絵巻」は、日本の絵画を代表する名品にして、紫式部の『源氏物語』を絵画化した現存最古の「源氏絵」です。十二世紀前半に白河院・鳥羽院を中心とする宮廷サロンで製作されたとみられ、現在、阿波蜂須賀家に伝来した一巻分が東京・五島美術館に、尾張徳川家伝来の三巻分が徳川美術館に所蔵されています。この四巻分と諸家に分蔵される絵や詞書の断簡を含めても、『源氏物語』五十四帖のうち二十帖分が知られるにすぎませんが、当初は相当の巻数にのぼる一組であったと考えられます。

なお、昭和七年（一九三二）に保存のため額面装とされていた徳川美術館の三巻分は、平成二十八年（二〇一六）から令和二年（二〇二〇）にかけて、保存上の観点から絵の段ごとに巻物十五巻の巻子装に改装されました。

絵は、やまと絵特有の「作り絵」という描法で、「引目鉤鼻」とよばれる人物の顔の表現、屋根や天井を取り払って俯瞰的に描く「吹抜屋台」の手法などにより、物語の抒情性や登場人物の心の動きまでもがみごとに描き出されています。

詞書は、十一世紀以来の伝統を受け継ぐ優美な連綿の書風や藤原忠通（一〇九七～一一六四）にはじまる法性寺流の新様の書風など五種類の書風（徳川美術館所蔵分は四種類）が混在しています。詞書は抄出文ですが、平安時代にさかのぼる現存最古の『源氏物語』のテキストとして、その価値は極めて大きいといえます。

第十五帖

蓬生 よもぎう

光源氏が須磨・明石に逃れている間、都でその庇護にあった女性たちは苦難を強いられていました。故常陸宮の姫君・末摘花もその一人です。

帰京した翌年、初夏の雨上がりの月夜、源氏は荒れ果てた邸の前を通りかかり、大きな松に懸かる藤の花や邸のたたずまいから、そこが故常陸宮の邸であったことを思い出します。従者の惟光を末摘花に仕える老女房のもとにやって源氏の来訪を告げさせ、邸の中に進みます。源氏はひたすらに自分を待ち続けた末摘花の誠実さに心を打たれ、涙して和歌を詠みます。

訪ねてもわれこそとはめ道もなく
深き蓬のもとのこころを（源氏）

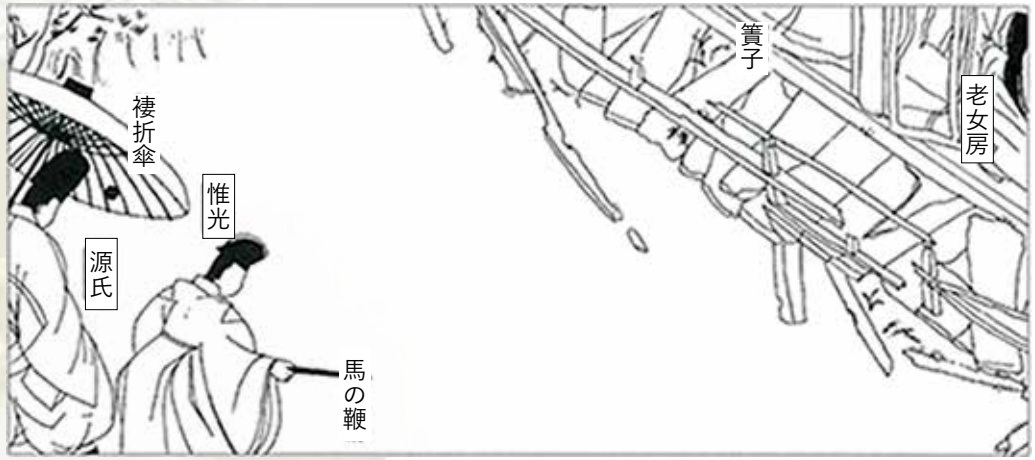
21.5 × 48.8 ㎝

●登場人物と年立て

光源氏が須磨・明石から帰京した二十八歳の秋から翌年四月まで

惟光　源氏の乳母子

末摘花　常陸宮の娘



第十六帖 関屋（せきや）／第十七帖 絵合（えあわせ）

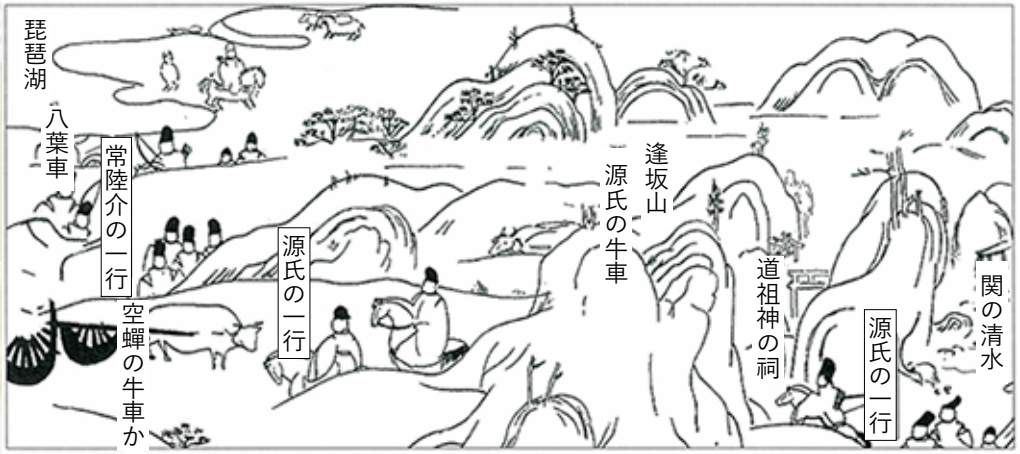
●登場人物と年立て

光源氏が二十九歳の九月から冬まで

常陸介　前の伊予介、空蟬の夫

空蟬　故衛門督の娘、常陸介の後妻

21.7 × 48.2 ㎝



源氏が十七歳のとき、ただ一度の逢瀬を過した空蟬は、夫・常陸介とともに任国へ赴いていました。その任が果てて帰京の途中、折しも石山寺に参詣する源氏の一行と空蟬の一行が逢坂の関で偶然出会う場面です。

時は九月末、紅葉の色や霜枯れの草が趣き深く見渡されるなか、源氏の一行が関屋からあらわれます。空蟬の一行も、人々の旅姿や牛車の様子も田舎びておらず風情があります。空蟬は昔を偲び、心に秘めた想いを和歌に詠みます。

行くと来とせきとめがたき涙をや
絶えぬ清水と人は見るらむ（空蟬）

「関屋」に続く第十七帖「絵合」は詞書のみが伝来しており、平成二十九年（二〇一七）の修復で「関屋」とともに一巻の巻物に合装されました。

絵合　詞書

関屋　絵

関屋　詞書

第三十六帖

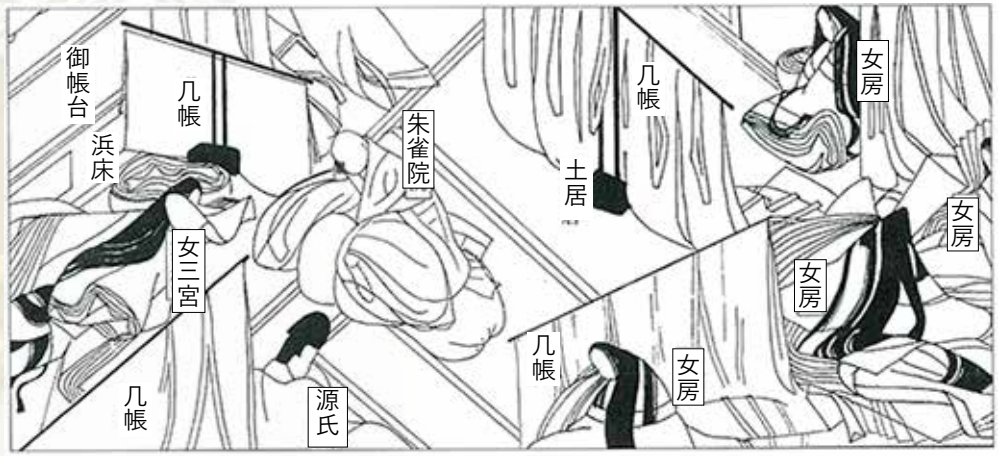
柏木 かしわぎ 一

柏木との密通の末、男子（薫）を出産した女三宮は、罪の意識と産後の衰弱のために臥せってしまいました。父である先帝・朱雀院は娘を心配し、仏道修行の身ながら、夜の闇に紛れて山を下り、突然六条院を訪ねます。

女三宮は、弱々しげに涙し、父・朱雀院に対して尼にしてくれるよう訴えます。朱雀院は考え直すよう女三宮を諭す一方で、源氏に対しては娘を出家させたいと告げます。源氏は、女三宮の出家願望は物の怪が惑わせているとして出家を認めません。

三人の葛藤する心理が示す沈鬱な雰囲気と、裳唐衣で正装した女房たちの華麗な色彩とが、画面の左右で対比的に示された場面です。

22.0 × 48.9 ㎝



●登場人物と年立て

光源氏四十八歳の正月から秋まで

朱雀院　桐壺帝の第一皇子、源氏の異母兄、五十一歳

女三宮の父

女三宮　朱雀院の第三皇女　源氏の二番目の正室、薫の母　二十二か二十三歳

第三十六帖

柏木 かしわぎ 二

光源氏の妻・女三宮（おんなさんのみや）と密かに通じ、自責の念から重い病にかかった柏木は、女三宮の出家を聞いていっそう衰弱しました。

病状を心配した帝により、柏木は急遽、権大納言に昇進することとなります。その祝いを兼ねて見舞いに訪れた親友の夕霧（源氏の息子）と病床の柏木は、病気平癒の加持祈禱（かじきとう）をしていた僧をしばらく外に出し語り合います。横になっている柏木の体調を気遣い、夕霧は几帳（きちょう）の端を引き上げ話しかけます。

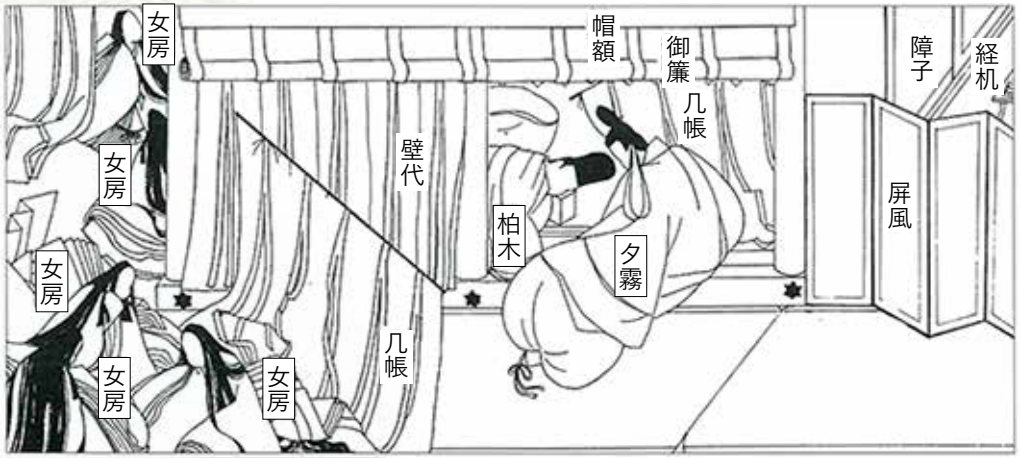
死期を悟った柏木は、夕霧に妻・落葉宮（おちばのみや）を託し、また自らの罪をほのめかし、源氏に許しを請うてくれるよう頼みつつ別れを告げます。

●登場人物

柏木　頭中将の長男、落葉宮の夫、薫の実父　三十二か三十三歳　死去

夕霧　源氏と葵上の子、雲居雁の夫　二十七歳

22.0 × 49.0 ㎝



第三十六帖

柏木 かしわぎ 三

女三宮と亡き柏木の不義の子である薫は、健やかに育って誕生後五十日の祝いを迎えました。祝いの餅が用意され、家柄・器量ともにすぐれた乳母や女房たちが華やかな装いで居並びます。

その盛大な儀式の席で、源氏は我が子ならぬ薫を抱き上げ、亡き柏木を思わせる気品を幼子の面差しに見出し、世間に明かすことのできない形見を残してこの世を去ってしまった柏木を不憫にも思います。そして、女三宮の心痛、薫のこれからの運命など、心によぎる苦く複雑な思いを和歌にして女三宮にささやきます。

誰が世にか種は播きしと人問はば
いかが岩根の松はこたへむ（源氏）

22.0 × 48.6 ㎝

●登場人物

光源氏　四十八歳

薫　表向きは源氏と女三宮の子、実は柏木と女三宮との不義の子　誕生

女三宮　朱雀院の第三皇女　源氏の二番目の正室、薫の母　二十二か二十三歳

第三十七帖

横笛 よこぶえ

柏木の死から一年が過ぎたある秋の夕暮れ、柏木の妻・落葉宮を見舞った夕霧は、帰り際に一条御息所（落葉宮の母）から柏木遺愛の横笛を贈られました。

その夜、三条の自邸に帰った夕霧が試しに横笛を吹くと、柏木が夢に現れ、笛を自分の子孫に伝えてほしいと和歌を詠みます。その気配に怯えたのか赤児が激しく泣いたため、乳母や夕霧の妻・雲居雁が目を覚まし、物の怪を退散させるために散米がおこなわれます。雲居雁は髪を耳挟みして、赤児に乳を含ませ、夫・夕霧にあなたが夜歩きをしたため物の怪が入ってきたのだと恨み言を言います。

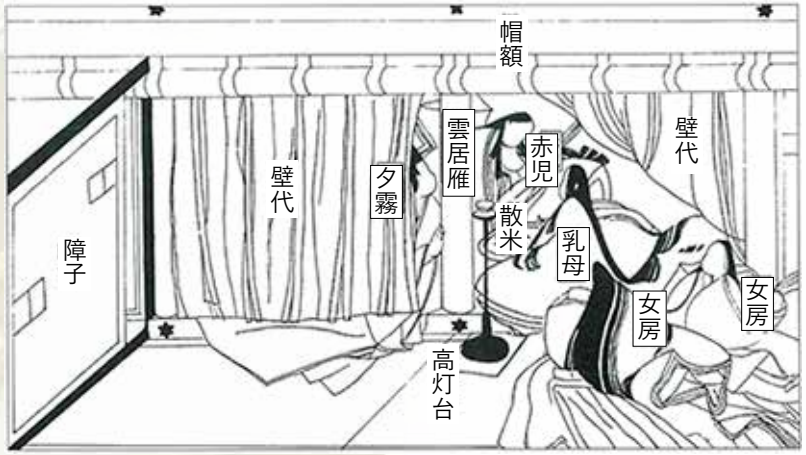
22.2 × 39.1 ㎝

●登場人物と年立て

光源氏四十九歳の春から秋まで

夕霧　源氏と葵上の子、雲居雁の夫　二十八歳

雲居雁　夕霧の正室、内大臣（頭中将）の娘、柏木の異母妹　三十歳



第四十四帖

竹河（たけかわ）

光源氏はすでに亡く、物語は成長した薫や匂宮（におうのみや）の世代に移って物語が展開します。

玉鬘（たまかずら）は、夫・髭黒太上大臣（ひげくろのだいじょうだいじん）が急逝した後、遺された大君（おおいぎみ）・中君（なかのきみ）の二人の娘の将来を案じていました。求婚者は多く、なかでも夕霧の子・蔵人（くろうど）の少将と薫が熱心でした。

正月の暮れ方、玉鬘邸を訪れた薫に、中将の君（ちゅうじょうのきみ）（宰相の君（さいしょうのきみ）とも）という女房が和歌に託して戯れかけると、薫は見事に和歌で返します。

折りて見ばいとど匂ひもまさるやと
すこし色めけ梅の初花（中将の君）

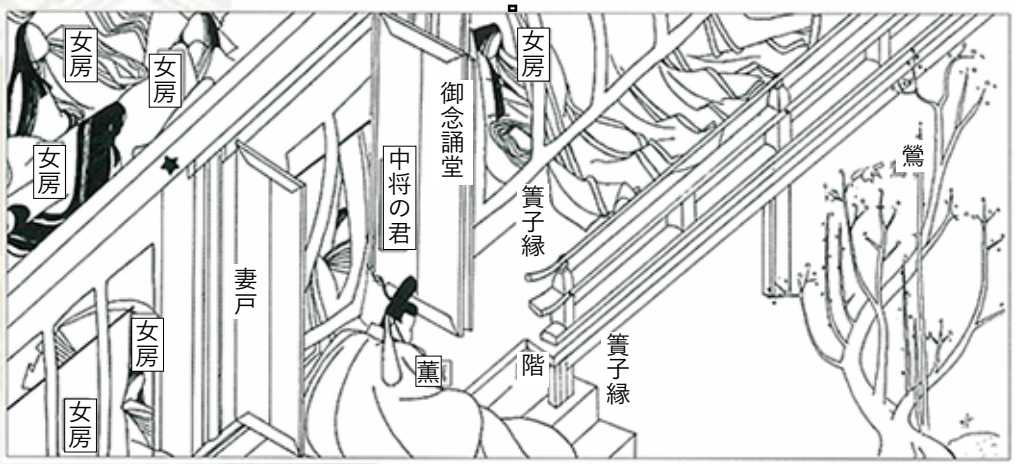
よそにみてもぎ木なりとやさだむらむ
したに匂へる花のしづくを　（薫）

22.1 × 23.8 ㎝

●登場人物と年立て

薫十四歳から二十三歳まで

玉鬘　光源氏の養女、実は頭中将と夕顔の娘、髭黒の妻　四十七～五十六歳



第四十四帖

竹河 たけかわ 二

三月の花盛りを迎えた玉鬘邸、姉の大君は十八、九歳の年頃で、桜の細長に山吹襲の袿と春にふさわしい色合いの装いです。薄紅梅の装束をまとった妹の中君は、すらりと優美ですが、華やかさは姉の方が勝っています。

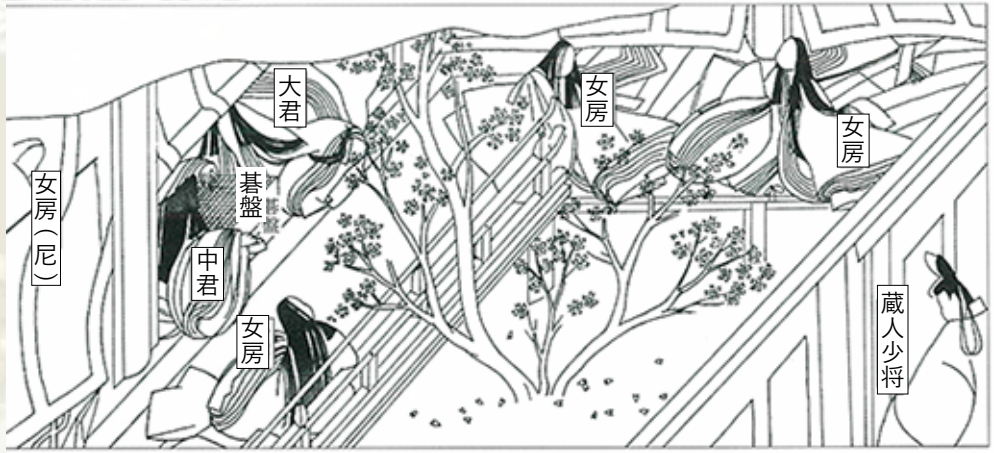
夕暮れが近づいてきたので、二人の姉妹は端近くに場所を移し、幼いときから争ってきた桜の所有権を賭けて三番勝負で碁を打ちます。その傍らで侍女たちも「永年のお争いだから」と囃し立て、数々の歌を詠み交わします。

大君に心を寄せる蔵人少将が、夕暮れの霞の中にほのかに浮かぶ大君の姿を垣間見て、いっそう恋心を募らせます。

22.1 × 48.7 ㎝

●登場人物と年立て

大君　髭黒と玉鬘の娘、中君の姉　十六～二十五歳
中君　髭黒と玉鬘の娘、大君の妹　十四～二十三歳
蔵人少将　夕霧と雲居雁の子　十八か十九～二十七か二十八歳



第四十五帖

橋姫

はしひめ

「橋姫」から「夢浮橋」までの十帖は、薫と宇治に住まう八宮の娘たちを中心に物語が展開するため、「宇治十帖」と呼ばれます。

光源氏の異母弟・八宮は不遇が重なり、宇治の山荘に二人の姫君とともに隠棲していました。晩秋、薫が宇治を訪れると八宮は留守でしたが、有明の月明かりの下で箏の琴と琵琶を合奏する大君と中君の姿を垣間見ます。雲間から急にあらわれた月に、琵琶の撥を手に、月を仰ぐ中君の姿はつややかです。そして箏の琴の上に体を傾けて笑う大君の様子には落ち着いた風情があります。二人の美しさが、薫の胸に鮮明に刻まれます。

22.2 × 48.7 ㎝

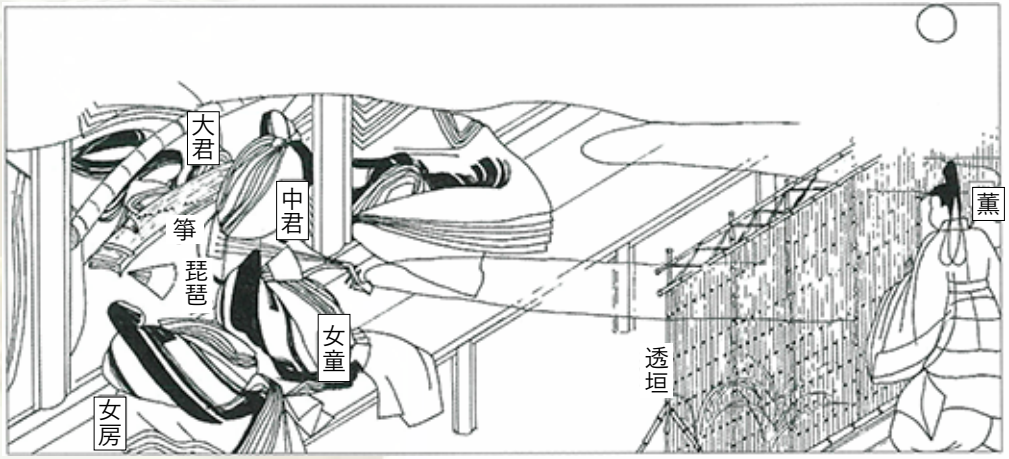
●登場人物と年立て

薫二十歳から二十二歳の十月まで

八宮　桐壺帝の第八皇子、源氏の異母弟、大君・中君・浮舟の父

大君　八宮の長女、中君の姉　二十二～二十四歳

中君八宮の次女、大君の妹　二十～二十二歳



第四十八帖

早蕨 さわらび

父の八宮（はちのみや）に続いて姉の大君（おおいぎみ）を失った中君（なかのきみ）は、悲しみのうちに春を迎えました。薫の手引きで匂宮（におうのみや）と結ばれた中君は、匂宮の邸・二条院へ迎えられることになります。

中君が宇治から京へと移る前日の朝、女房たちは転居に心躍らせ、上京のための新しい縫物や反物の整理に余念がありません。しかし、弁尼（べんのあま）は、その日訪れた薫の心情や言葉を中君に伝え、涙にくれます。中君は宇治にとどまる弁尼と別れを惜しんで、和歌を交わし涙します。

人はみな急ぎたつめる袖のうらに
ひとり藻塩を垂るるあまかな（弁尼）

しほ垂るるあまの衣におとらめや
浮きたる波にぬるるわが袖（中君）

21.5 × 39.8 ㎝

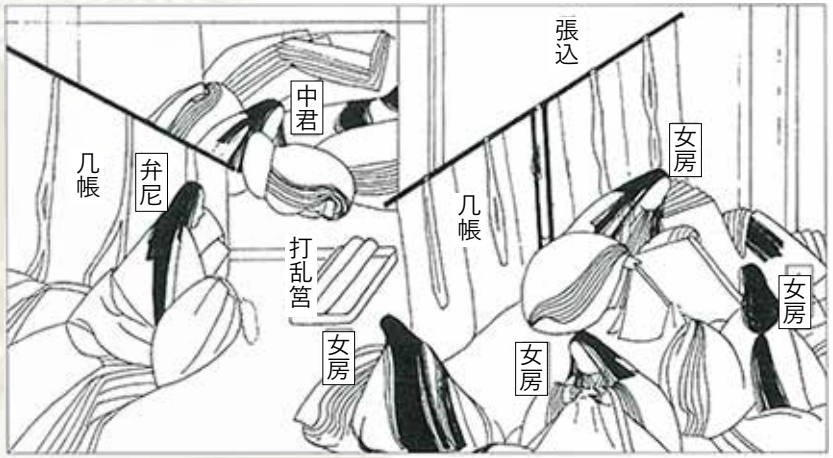
●登場人物と年立て

薫二十五歳の正月から二月まで

匂宮　今上帝の第三皇子、母は明石中宮、二十六歳
　　中君の夫

中君　八宮の次女、大君の妹、二十五歳
　　匂宮の妻

弁尼　八宮の女房、母は柏木の乳母



第四十九帖

宿木 やどりぎ 一

今上帝は母を失った娘・女二宮の将来を思い、薫を婿にと考えていました。秋の時雨降る夕方、帝は参内していた薫を碁の相手に呼びます。

三番勝負に勝った薫に対し、帝は「今日はこの花一枝を許す」と古歌に託して、女二宮の降嫁をほのめかします。亡き大君を慕う薫は、帝の意図を悟り、黙って庭の菊の一枝を手折り、辞退する意志を和歌に託します。しかし、帝も女二宮の美しさを返歌に込めて説きます。

世のつねの垣根に咲ける花ならば
心のままに折りて見えまし（薫）

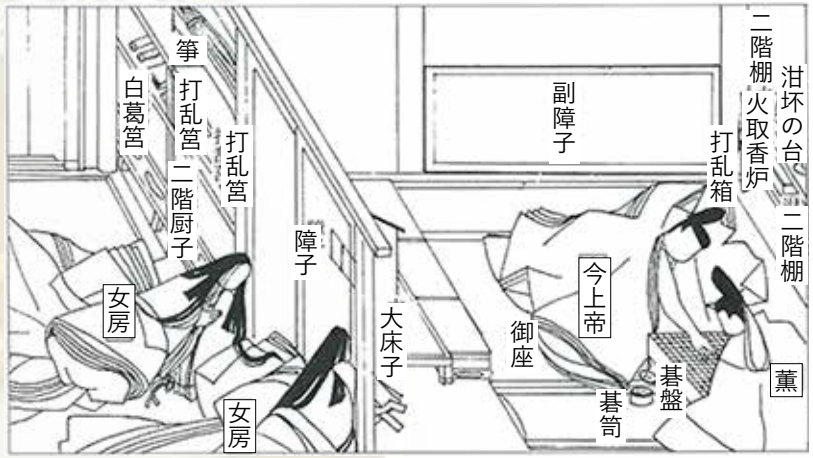
霜にあへず枯れにし園の菊の花
のこりの色はあせずもあるかな（今上帝）

21.6 × 38.6 ㎝

●登場人物と年立て

薫二十四歳の春から二十六歳の四月まで

今上帝　朱雀院の第一皇子、明石中宮の夫、匂宮・女二宮の父　四十五～四十七歳



第四十九帖

宿木 やどりぎ 二

匂宮（におうのみや）は、母・明石中宮（あかしのちゅうぐう）からの勧めもあり、気が進まないまま、夕霧の娘・六君（ろくのきみ）と結婚することになりました。

婚姻三日目の宴があった翌日、陽の光に映しだされた六君の姿を、匂宮ははじめて見ます。六君は程よい背格好で、髪かたちや肌の色つや、目元も美しく、全てを兼ね揃えており非の打ちどころがありません。二十一、二歳の今が盛りの花とみえ、万事に優れて才気に満ちた、その美しさに匂宮は魅せられていきます。

傍らには、美しい若い女房たちや女童（めのわらわ）、いずれも選りすぐりの者たちが、通常の盛装では匂宮が珍しげには思わないだろうと、常識を上回るほど趣向を凝らした装束で居並んでいます。

21.6 × 38.2 ㎝

●登場人物

匂宮　今上帝と明石中宮の皇子、中君の夫　二十五～二十七歳

六君　夕霧の六女、母は惟光の娘・藤典侍　二十か二十一～二十二か二十三歳

第四十九帖

宿木（やどりぎ）三

21.5 × 49.0 ㎝

●登場人物

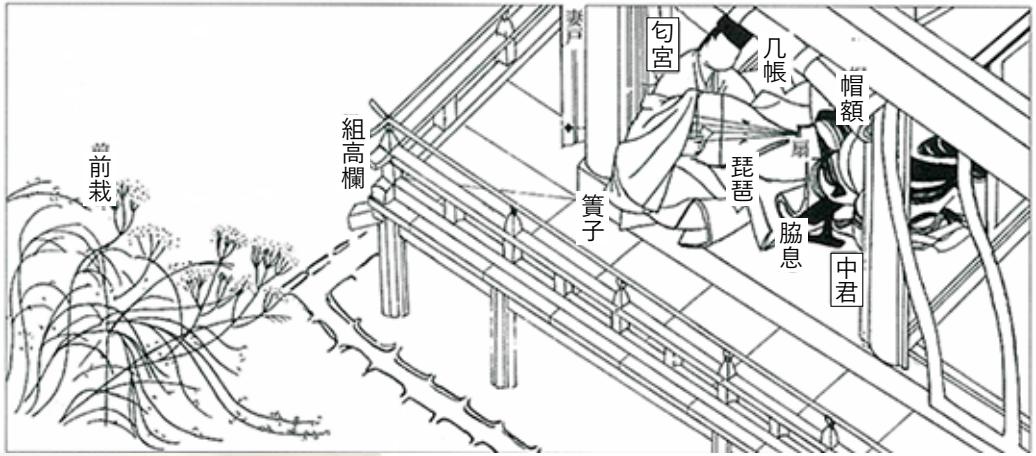
匂宮　今上帝と明石中宮の皇子、中君の夫　二十五～二十七歳

中君　八宮の次女、匂宮の妻、大君の妹　二十四～二十六歳

秋の夕暮れ、久しぶりに身重の中君（なかのきみ）のもとを訪れた匂宮（におうのみや）は、折しも薫から中君に届いた文に、二人の仲を邪推（じゃすい）し、前庭の秋草に託して和歌を詠みます。疑いをかけられ、恨み言を言う中君を慰めるため匂宮が琵琶を弾くと、中君もすねてばかりはいられず、脇息（きょうそく）に寄りかかり、几帳（きちょう）の端から少し顔をのぞかせます。

秋はつる野辺のけしきもしのすすき
　ほのめく風につけてこそみれ（中君）

中君は、匂宮の心移りを和歌に託し涙ぐみますが、それを恥じるように扇で顔を隠します。匂宮はそんな中君を愛おしいと思いつつ、薫との仲を邪推する自分を恨めしく思います。



第五十帖

東屋 あずまや

21.5 × 39.8 ㎝

故八宮の娘で、大君と中君の異母妹にあたる浮舟は、その境遇を案じる母・中将の君によって二条院の中君に預けられました。中将の君は娘・浮舟と薫との縁談を進める中君に万事をゆだねますが、浮舟は帰邸した匂宮に中君の妹と知らずに言い寄られ、辛うじて難を逃れます。

中君は、傷心の浮舟を不憫に思い、自室に招き入れます。女房に髪を梳かせつつ、中君は浮舟に優しく語りかけ、絵物語などを出させて、女房の右近に詞書を読ませます。絵に見入る浮舟の容貌は、亡き姉・大君、ひいては亡き父・八宮を思わせ、中君は感慨深く眺めます。

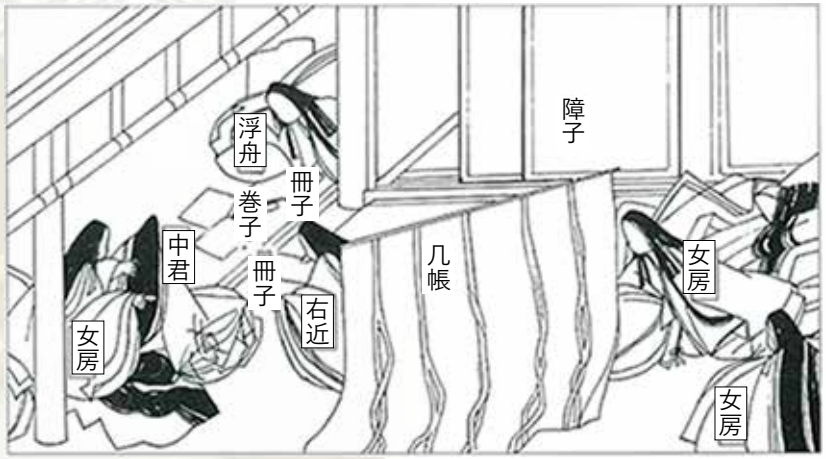
●登場人物と年立て

薫二十六歳の八月から九月まで

中君　八宮の次女、匂宮の妻、大君の妹、二十六歳

浮舟の異母姉

浮舟　八宮の第三女、中君の異母妹　二十一歳前後



第五十帖　東屋（あずまや）　二

浮舟の母・中将の君（ちゅうじょうきみ）は、匂宮（におうのみや）との一件を聞き、浮舟を三条の隠れ家に移しました。浮舟に想いを寄せる薫は、弁尼（べんのあま）からこのことを聞き、浮舟との仲介を頼みます。

秋の冷たい雨が降る夜、薫は密かに浮舟の隠れ家を訪ねます。えも言われぬ芳香が漂ってきて、弁尼は来訪者が薫であると気付きますが、予想もしていなかった女房たちは戸惑います。薫の突然の来訪に、対応に困り思い悩む浮舟に、弁尼は薫の思慮深い性格を説き、薫に会うようにと説得します。雨は一段と強くなり、成り行きをじっと待つ薫は和歌を詠みます。

さしとむるむぐらやしげき東屋の
あまりほどふる雨そそぎかな（薫）

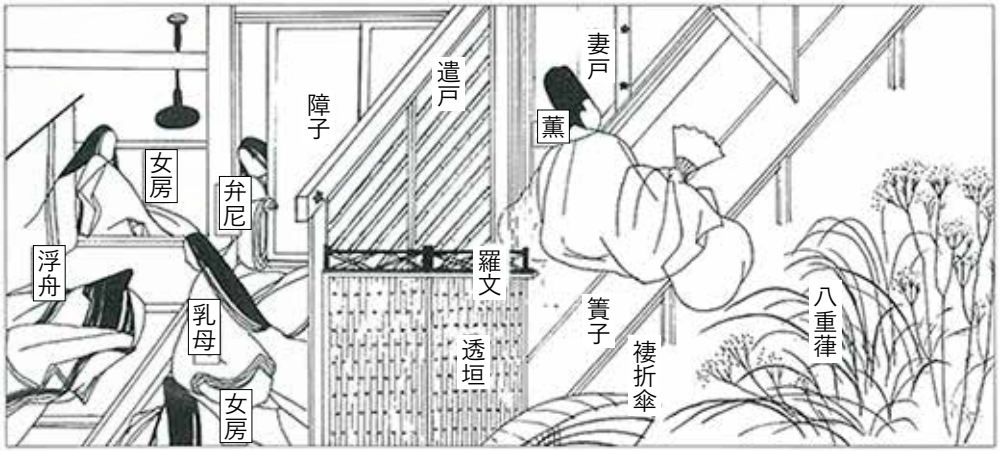
21.5 × 48.9 ㎝

●登場人物と年立て

薫　二十六歳の八月から九月まで

浮舟　八宮の第三女、中君の異母妹　二十一歳前後

弁尼　八宮家の女房、母は柏木の乳母



© 2020 徳川美術館 The Tokugawa Art Museum